

(京都府)

古代の最先端と現代の最先端が同居融合するまち 目指すのは子育て支援ナンバーワンのまちづくり

現地域のルーツは平城京や
恭仁京と共に栄えた集落群

旧京都府相楽郡木津町・加茂町・山城町の3町合併により、木津川市が誕生したのは平成19(2007)年3月12日のこと。従って、本誌・今号発行から約1カ月後の3月12日に、木津川市は市制施行・満15年の節目を迎えることになる。そして木津川市発足から15年の間、一貫して木津川市政をけん引してきたのは、旧木津町の最後の町長でもあった河井規子市長(平成19年4月22日就任、取材時/令和3年11月30日現在で4期、足掛け15年目)だ。

生まれも育ちも木津川市(旧木津町)の河井市長は、木津町議会議員を4期務めた後、平成16(2004)年、前木津町長の任期半ばでの退任後に急きよ行われた町長選に出馬し、当選。それは同時に、折から持ち上がりつつあった「平成の大合併」のかじ取り役を担うことをも意味した。

町長就任後、公約に掲げた冒頭の旧3町による合併話を具体化していく中、河井市長は3町合併協議会の会長も務めることになり、最終的に合併を実現に導いた。

このように、旧町時代の町長にして、合併協議会の会長も務め、新市誕生に当たっては初代市長に就任、現在までそのまま4期以上務め続けている女性首長の存在は、唯一無二ではないだろうか。

「いや、そんな大それたこと、考えたこともありません(笑)。しかし、3町の合併による木津川市の誕生までのプロセスは、本当に大変な、まさに嵐のような日々でした。そうした状況の中で、お辞めになった前町長の後を引き継いで、木津町長選に出るのは文字通り、火中の栗を拾うようなことでした。でも、それをあえてしようとする方がほかにおられなかったため、やむにやまれぬ気持ちで私が出馬することになったというのが、正

かわいのりこ
河井規子
木津川市長



直なところですよ。

私は本来、町長選に出るようなタイプではなかったのです(笑)。でも、3町が当時抱えていた数々の地域課題や、将来的な人口減少の波に立ち向かうには、3町の力を結集するのが何よりだという思いから、合併に賛同していただいていた加茂町・山城町の町長さんたちと手を携え、合併への道を貫き通すことになりました。

だから、木津川市は難産で生まれたわが子のような思いが強く、何としても立派な

移住する子育て世帯にも好感度が高い、大都市では希少な木造校舎（恭仁宮跡に隣接する恭仁小学校）



1300年の歴史を秘めながら静かにたたずむ恭仁宮跡（山城国分寺跡）

大人に成長してほしいと願っています」

そう言って朗らかに笑う河井市長は、合併前後の嵐のような日々を振り返りながら「合併は成るべくして成った」と思える歴史的な事実を後日知り、「運命的なものを感じました」とも述懐する。

木津川市には8世紀の聖武天皇の御代（神亀元／724年〜天平勝宝元／749年）に、平城京から平安京へ遷都する過程で足かけ5年（天平12／

740年〜天平16／744年）だけ、都として機能した《恭仁京》の遺跡がある。恭仁京の中心・恭仁宮（宮殿）があったのは旧加茂町域だが、最新の研究では恭仁京を構成していた各種の建物や寺社、道路などの跡はかなり広いエリアに展開しており、恭仁宮（加茂町）を中心に木津町・山城町も含めた3町のほぼ全域が京域内にあったとする説が、有力になりつつある。

「町長に就任してからは、町長選の最大の争点だった《合併がなぜ必要か》ということについて、住民の皆さまに改めて理解していただきたいということで、私は管理職の方たちと共に、土曜・日曜も夜分も関係なく、各地



秋に包まれる浄瑠璃寺

区の集会所を全て回らせていただき、合併に反対だった住民も少なくない中、パワーポイントを使って合併後のまちづくりへの理解を求めました。

また、旧3町の皆さまに不公平感を感じさせないよう、合併後の市政運営では、なるべく3町平等に施策や事業を行うよう配慮しました。その一方で、合併後には避けて通れない、いろいろな痛みを伴う行財政改革を行わなければならないなど、心身共に消耗するような日々を送っていました。しかし、ちょうどそんなときでした。

恭仁京の時代には旧3町が一体だったとする最新の研究成果を知り、ああ、この合併は成るべくして成った、平城京や恭仁京から1300年ぶりに、兄弟・姉妹のようなまちが再び一つになったのだと、すごく運命的な思いがしたのです（河井市長）



子育て支援ナンバーワンのまちを 一貫して目指す理由

木津川市と同様に、合併に至るプロセスや合併後の苦難は、全国各地の都市が、それぞれの形で経験してきた。そして、合併の《成果》に対する評価の指標には、さまざまな基準もあるが、評価の指標を代表するのは、やはり人口の推移、端的には合併後に人口を増やすことができたか否か、というポイントだろう。

そういう意味合いにおいて、旧3町のエリアが1300年ぶりに「一つのまち」になる形で誕生した木津川市の合併後の推移は、順調

な人口増によって、成功の指標を見事に示しているといえる。

「合併した時点での木津川市の人口は6万6490人でした。その内訳は木津町が4万1000人強、加茂町が1万5000人強、山城町が9000人強で、木津町の人口が飛び抜けていたわけですが、これは大阪府、京都府、奈良県にまたがって建設される関西文化学術研究都市（以下、学研都市）の中核地として実

施された、木津町の開発による人口増といえます。

1990年代から始まった、国家プロジェクトとしての学研都市建設に伴い、ニュータウンが次々建設されていったことなどから、木津町の人口は急増

しました。本来の都市規模からいえば、木津町も加茂町も山城町も、人口はそれぞれ1万人から1万5000人程度で推移していたはずですが、それが木津町に限っては学研都市の建設で急増したのです。しかし、その木津町も合併直前には、学研都市建設計画の部分的見直しや停滞などから、人口増も鈍りがちにあり、先行きの見通しがあまり明るくない状況に陥っていました。

さらに加茂町・山城町に至っては、現状を打破する兆しが見えないということで、結果的に3町による合併を行い、行財政改革と共に多角的な地域活性化策を推進したわけです。その結果、平成22(2010)年6月に人口は7万人に到達し、平成28(2016)年10月には7万5000人を突破しました。木津川市



人類の未来と幸福のために、何を研究すべきかを研究する公益財団法人国際高等研究所



地球環境の保全および世界経済の発展に資することを目的とする公益財団法人地球環境産業技術研究機構(RITE)

はこの時点で、発足から10年近くにわたり、毎月平均70人ずつ人口を増やしてきたことになりません。これは人口増加率としてかなりの高水準です。

そして令和3年11月1日現在の人口は7万9593人。令和2年〜6年を期間とする『第2期木津川市まち・ひと・しごと創生総合戦略』（以下、第2期総合戦略）では、今後手だてを何も講じなければ、人口は令和12(2030)年にピーク(8万3000人)を迎えた後、下降すると予測しています。それを覆し、さらに成長を続けていきたいというのが、私たちの希望です（河井市長）

人口増のピークの訪れを先延ばしするため手段の核は、河井市長が木津町長時代からスローガンとして掲げている「子育て支援ナ



子育て支援NO.1を目指して

木津川市

(京都府)

市 政 ル ポ



増加する子育て世帯を支える子育て支援センター

「ンバーワン」を目指す取り組みと、マーケティング・マインドを多彩に活用した地域活性化への取り組みだ。第2期総合戦略が目指すのは、令和12年の目標人口を8万3000人から8万4700人へ上げ、合計特殊出生率の目標を現在の1.5台から令和12年までに1.8へ、令和22(2040)年までに2.1へと上方修正すること。さらに人口減少が予測される令和42(2060)年の段階でも、人口8万1200人の維持など、各種の前向きな目標を掲げている。

それを成し遂げるのに必要なのは全庁的な取り組みだが、軸に据えているのは、子育て支援のあらゆる施策・事業を管轄する《こども宝課(教育部)》と、市のブランド力向上や魅力発信などのシテイ・プロモーション全般を担当する《マチオモイ部》の存在だ。

「第1期木津川市まち・ひと・しごと創生総合戦略」が策定されたのは、平成27(2015)年10月。マチオモイ部の発足は同年7月で、こども宝課の発足は翌平成28年4月のことだ。ユニークな名称を冠された両部署が総合戦略の推進エンジンとしての役割を期待されていることは、その発足時期からも推測できる。

マチをオモイ子どもを地域の宝とする多彩な取り組み

「マチオモイ部とかこども宝課とか、変わった名前だと思われるかもしれませんが、でも、庁内的にも市民の皆さまにも、こういう部署を改めてつくることの狙いを、ストレートに知っていただきたいという思いから、あえて、そんな名称にさせていただきました。

実際、私が木津町時代から訴えてきたのは、子どもはご両親の宝物であると同時に、地域の宝物であるという共通認識が地域になれば、その地域はこれから訪れる人口減少時代の波に、確実にのみ込まれていくだろうということでした。

その前提としてあるのが、市民の皆さまが地域ですつと暮らし続けていきたいと思っただけのようなまちづくりであり、そのために欠かせないのが次代を担う子どもたちです。地域が常に元気で、活気に満ちているような状況をつくるには、そうした世代の循環が第一の条件になります。もちろん、雇用の場の確保など経済対策も重要ですが、合併から日の浅い市域の本当の魅力を、今いる市民の皆さまにより幅広く知っていただくことはさらに重要です。

その際に木津川市の強みになるのが、京都府でも京都市に次いで国指定文化財が多いという歴史・文化の深さです。その概要を知っ

ていただくだけで、地域への愛着を高める有効な手段となります。

さらに、市の職員が率先して、常に地域のことを思い、市民の幸福を思いながら、エネルギーに活動する姿を市民の皆さまに感じていただくことも、非常に大事な要素だと考えます。以上のようなことから、子育て支援課を《こども宝課》とし、地域振興部門をまとめて《マチオモイ部》としたのです(河井市長)

河井市長は合併をして良かったもう一つのポイントとして、3町の優秀な職員が一つの自治体に集まったことを挙げる。

「旧町から引き継いだ宿題としての施策や事



多くの見物客が集まる木津川市夏祭り



環境の森センター・きづがわ

業が、みんなの英知や財政力を一つに集めることで、ぜひぶん解決しました。その代表的な事業として、例えば旧町時代には実現できなかった清掃センター（環境の森センター・きづがわ）の建設が平成30（2018）年8月に完成したことが挙げられます。

それは子育て支援策についても同様です。個人的な思いとしては子育てに関する事業は全て無償で行いたいというのが本音です。もちろん、現状ではさすがに難しいですが（笑）、財政規模の割にはぜひぶんお金をかけている方だと思えます。

例えば、保育園や幼稚園に入っていない満6カ月以上の子どもさんを保育園やこども園で一時預かりするシステムを早い段階から構築しました。また、木津川市は子育て世帯の転入が多いことから、育児や入園手続きなどの相談にワンストップで対応する『保育コンシェルジュ』を市役所内に配置しています。

さらに『つどいのひろば』事業として、市内3カ所の商業施設に保育士が常駐し、親子あそびの紹介や絵本の読み聞かせなどの交流、

子育てに関する相談ができる支援の場として、お買い物ついでに気軽に利用していただいております。また、医療機関ごとに月200円を負担していただければ、0歳から中学校卒業までは医療費を無償にしているほか、『産後ケア』事業にも力を入れています。『産後ケア』事業は市内外の助産院などにご協力をいただいで、家庭の事情などで育児に不安のある母子を対象に受け入れ、心身のケアなどを行うもので、宿泊型と日帰り型があります。その場合の利用料も、宿泊型で1泊6000円、日帰り型で3000円に抑えるなど、経済的な負担の軽減にも取り組んでいます。



小学生の通学風景

そのほか教育支援なども、財政の状況とにらめっこしながら、いろいろやっておりますが、一番重要なのは、どんな施策・事業をやったということ以上に、市民の皆さんや地域の総意として、子どもたちの存在や育ちこそが、何をおいても『地域の宝』なのだということコンセンサスを官民共に醸成することだと考えています。

子育て支援ナンバーワンを目指すというのは、そういう姿勢を市民の共通認識とし、全てのまちづくりや地域の活性化を図っていくということであり、そういうまちづくりを目指す実践すること。だから、終わりが無いのです」（河井市長）

活性化の要は奈良時代以来の豊かで深い歴史・文化

市制施行以来、コンスタントに人口増を続ける木津川市の要因は多彩だ。学研都市としての発展を見込んだニュータウンの建設については、既に述べたが、そもそも学研都市の中核地に木津川市が選ばれた前提として、交通至便な環境が挙げられる。近畿圏のほぼ中央部に位置する木津川市は、京都市から30km圏内、大阪市からは40km圏内にあり、奈良市とは隣接している。JR奈良線、学研都市線、関西本線が木津駅で合流し、近鉄京都線が市内西部を走っている（市内の鉄道駅は計7駅）。また京奈和自動車道、国道24号、163号な

木津川市

(京都府)

市 政 ル ポ



開発が進む関西化学術研究都市(城山台地区)

どの主要幹線道や主要地方道などが四通八達している。

木津川市の交通の要衝ぶりは古代以来の伝統だ。そもそも市名の語源となっている木津川は、三重県最奥の山間部から淀川を経て大阪湾にまで注ぐ、古代からの物流の大動脈で、平城京建設の際の木材や石材などは皆、旧木津町の川湊(木津)を通じて運ばれた。現在の主要国道や地方道の多くも、古代以来の信楽道、奈良街道、木津川西道、伊勢街道などを踏襲したり、軸として整備されている。

さらに学研都市という、現代最先端の各種技術研究機関が集約する環境が整っている。こうした多彩な環境の中、古代の最先端都市ともいえる平城京や恭仁京以来、1300年の伝統を誇る歴史的遺構までもが市域全体に遍在している。先端と先端が融合している。「平成22年から開催を続けてきた《木津川アート》は、市内各所の歴史的遺構や寺社、現役の民家や空き家、工場、休耕地や河原など、あらゆる場所を展示会場にした屋外アート展です。新進気鋭の作家さんによる現代

アートの魅力に触れながら、木津川市の持つ自然や歴史、都市的魅力など、あらゆる環境を市内外の方たちに知っていただくこととする目的で始めたイベントです。今年(令和3年)は10月31日、11月14日まで、旧恭仁宮跡を中心とする瓶原地区を舞台に開催しました。本来なら昨年(令和2年)に実施予定だった会期が新型コロナウイルス禍のため、延期になっていたのです。

この《木津川アート》をきっかけに、地域で移住を支援する取り組みが生まれ、空き家を買って移住する子育て世代の方が多くおられるといった効果も生まれ、地域が元気になっています(河井市長)

人口減少の最大の抑制策として期待されるのは言うまでもなく、合計特殊出生率の上昇だ。木津川市が備える、地域資源としてのあらゆる環境(歴史・文化的環境、交通至便な都市的環境、先端企業が集約する雇用環境など)を、アート展を通じて味わい尽くし、新たな住ま

いの地として選んだ子育て世代は、恐らく「こんなまちで子育てをしたい」と心の底から考えたものと思われる。

まさしく、子育て世代にこうした心の動きを起こさせるようなまちづくりこそ、単にうわべの人口を増やすだけでない、合計特殊出生率の上昇という実質を伴った、持続可能なまちづくりの要諦というべきだろう。

子育て支援ナンバーワンのまちを目指す木津川市の将来展望は、市制施行から15年の節目を迎えようとしている現在、第2期総合戦略においてさまざまな目標値の上方修正を行うに足る領域へ、ゆつくりと、だが着実に入りつつあるようだ。

(取材：文〓遠藤隆／取材日〓令和3年11月30日)



木津川アート(恭仁宮跡に展示された風と空気の柔らかい彫刻)



木津川アート(木津川を飛び越えていきそうなうさぎ)